

園長だより

秋晴れが続き、焼き芋の会、3. 4歳児の徒歩遠足、5歳児の電車遠足はより充実したものになりました。

秋の自然を満喫したり、園外に出て社会とのつながりを実体験を通じて知る機会など、実り多い活動が行われました。

久しぶりの便りと思っていましたが前号から 2 週間ほどの間隔に「あまり発刊の間はあいていませんね」と思いながら筆を走らせます。



「 便利さが奪ってしまうもの 」

私は電車で通勤します。自家用車も時折利用しますが時間は正確、そして、何よりも行き帰りの道中で様々な社会事象に出逢えることがあるので電車での通勤を選んでいきます。

数日前の電車遠足では子ども達も胸躍らせ乗車していました。

車社会の昨今はDOOR To DOORというように自宅から目的地まで楽に快適に行けることができます。車は小さな家庭のようなもの、外界からの刺激もほとんどなく、他人とのかかわりもほとんどないのが現状、周囲の状況に応じて、譲ったり、譲られたり、

心を動かされる行動をとる場面もありますが機械的に対応することが度々です。

子どもの学びや社会との接点を便利な世の中が奪ってしまっているといえるでしょう、車の利用に偏らず電車、公共の交通を利用すると様々なコミュニティーに出逢い子どもなりに社会での振る舞いや態度を学ぶ機会がもてることとなります。

時々気分を変えて子ども達の社会での学びの機会を作ってあげてはいかがでしょうか。

「 電車の中から 」

電車の中には中吊りの広告などがあります。世の中の情報、健康に関すること、季節の歳時記の内容等、この時期は高校、大学の入試を控え、各校の入学案内の広告、PRが多くみられます。

その中で保育士を養成する短期大学の広告が目にとまりました。以下、こんな内容です。

「 子どもの育ちはだれ一人としておなじではありません。

子どもの理解やかかわりにも一つのこたえだけではありません。(中略)

それをになう保育者への教育も創造的でありたい 」

広告の文面を読みながら、おおぞらの子ども達、保育に従事する職員、そして自分自身のことを考えました。

当たり前の事を書いているものの、当たり前を当たり前のごとくすることの難しさもあります。

机上の学習や空論ではかることができないことが、毎日、いきいきと生活している子ども達に起こっています。

生きている、ひとり、ひとりが主体になり生きていることが保育園では、日常化されなくてはならないと思っています。

ひとり、ひとりの興味関心、育ちに応じたかかわりをする大切さがあります。

個々の尊重があり、その尊重された子どもの集まりが集団をなしていくと考えます。

広告の一文のように「子どもの理解」がポイントになります。ここでは机上で学ぶ発達過程ではありません。目の前にいる子ども達から学び、ひとり、ひとりを理解して知っていくことです。

「 理解の中には 」

話は少々脱線しますが「センス オブ ワンダー」(レイチェル・カーソン著)の本の一節に、「わたしは、子どもにとっても、どのように教育すべきか頭をなやませている親にとっても「知る」ことは「感じる」ことの半分も重要ではないと固く信じています。」と綴られています。

※本の内容は自然の中の神秘さや不思議さに目をみはる感性を育み分かち合う大切さを伝えているものです。

一節の「感じる」を保育に置き換え考えて

みると、子どもを知ることの大切なキーに「感じる」ことの大切さがあることです。

今、目の前にいる子ども(子ども達)が何を感じているのだろうか 何を思っているのだろうか、何をしたいのだろうか、

特に言語的表現が確立される以前の状態にある子どもについては、そばにいる大人、寄り添う大人が幾つものアンテナをはり、対象の子どもをみていくことは当然、加えて周囲の状況やその子がおかれた前後の時空間での出来事等、様々な事柄において感じる、感じてあげることが子ども達の内面まで、しつかりと受け止めることとなります。

「 節目に立ち会える喜び 」

先日、姪の結婚式に参列しました。小さかった頃の思い出が走馬灯のごとく浮かびました。

今までも成長の節目に立ち会った事があり、そのたびに、この上ない幸せを感じました。

保育園で働いていると園児の数だけ、成長の節目に出逢えます。

この仕事の良さと言えるでしょう「子ども達を理解し知ること、感じること」が、成長の節目で何にも代えがたい幸せにつながることとなります。

大人が忘れかけている好奇心、目の前の子ども達を感じ、知り、共に生活を営んでいきたいものです。

(園長 廣部 信隆) 6